

家事を通して、「役に立つことの喜び」(共同体感覚)を育てましょう！

明治大学教授 諸富祥彦

★★子どもに、家事をさせましょう！★★



小学生、中学生であれば、「家事をするのは当然」という感覚を身に付けさせたいものです。

「お手伝い」ではありません。「お手伝い」というと、「家事は基本的にお母さんがやるもの」「お父さんや子どもはそのお手伝いをする」という捉え方がその前提にあります。

しかし、考えてみましょう。家族のメンバーである限り、家事をやるのは当然のことなのです。「家族というチームのメンバーの一員」として当然自分も家事をするものだという意識を育てていくことが大事です。

例えば、お子さんがお風呂掃除をすれば、「自分が綺麗にしたお風呂」にみんなが入ることができます。そしてお風呂掃除をしたことに対して、家族のメンバーが「ありがとうね。〇〇のおかげで気持ちよくお風呂に入れるよ」と言ってもらえます。

このことはお子さんの中に「チームの一員としての意欲」を育てていきます。

「家族というチームのメンバーとして、自分にもできることがある」「自分にできることをしたら、みんなが喜んでくれる」そういう感覚が子どもの中に育っていきます。これは「自己有用感」といって、社会性の基礎になるものです。学校では、運動会などの行事や、係活動などを通して、この感覚を身に着けますが、そのもとになるのが、家庭での「家事」の体験です。

お子さんには是非小さい頃から「自分も家族のために役に立つことができるのだ」という、この感覚を味わわせてあげたいものです。



★★いつから任せる??★★

家事は、小学生ぐらいの子どもの成長において、最も大切な意味を持ちます。子どもの社会性、集団での行動力がぐんと伸びる時期だからです。

けれども、ある日突然「今日から家事をしてね」と言われても、お子さんは戸惑うことでしょう。できれば3~4歳ぐらいから、少しずつ家事をする習慣をつけるのがオススメです。

ちょっとしたことで構わないのです。テーブルにお皿とお箸を並べる、玄関の靴を揃える、など、簡単で楽しみながらできる家事をしてもらいましょう。

もちろん小中学生であれば、お風呂掃除なども手伝ってもらおうと良いと思います。食器の片づけでも、餃子づくりでもよいでしょう。

「家事って楽しい」「家族のために何かするって楽しい」「家族のために自分にもできることがあるのは喜びだ」こうした感覚(アドラー心理学でいう「共同体感覚」)を育てていきましょう。

